

帰還不能点



劇団チヨコレートケーキ

【四〇代】

▼作品内容について「戦争モノは過去を題材としたものであるという前提は現在の国際的状况においては崩れてしまっていることを改めて突きつけられていると感じた。「自分たちが反対し

たところで仕方がない」という思考は現代にも通じるところがある(国民の選挙への無関心を想起せずにはいられない)。一人一人の諦めの集合体こそ国の最大の力であり、諦めという消極的姿勢こそが国(政府)の力を増大させる源であるから、たとえ微力だとしても声を上げることの意味を考えさせられた。女が男に助けられ、守られる存在であるという旧時代的な価値観のもとで物語が進んでいくことに何ら注釈が付されていないと感じられる脚本に疑問を抱いた。男たちが飲み食い騒ぐ様子を、女が世話をして見守るところか、彼らの喧騒を受けて、本作品の見せ場である亡夫との回想シーンへと繋がるという流れに嫌気が差してしまつた：演出について「す

べての役者に複数のキャラクターを演じさせることにより、役者一人一人の演技の幅を觀られて面白かつた。主なキャラクター(東條英機ほか三名)それぞれに象徴的な小道具をわりあて、役者が代わる代わる身につけることで、どのキャラクターに扮しているかが伝わりやすかつたのが良かつた。演じる役者によってキャラクターの多面性が表れているようにも感じられたのも良かつた。舞台美術について「シンプルながらも象徴的な装置(物語の舞台である居酒屋の壁柱)が、照明の照らされ方によってさまざまな模様を浮かびあがらせて、舞台上で練り広げられている状況に対して抽象的な背景が重なって、解釈が広がって楽しめた。

(女性)

【五〇代】

▼歴史好きの私にとって関心のある作品でしたが期待通りの内容で感動しました。同時に古川健さんの脚本も素晴らしく戦後はや七九年を迎える今でもこの戦争について決して風化させてはいけない未来へ語り継ぐべきこととして国家、国民の中で時として多様な意見や激論が交わされております。なぜ?対米戦やむなしの世論が沸き起こっていたのか?なぜ?時の内閣は総力戦研究所の「日本必敗」の合理的結論を無視して愚かで悲劇的な対米戦へと突き進んだのか?等々謎は尽きません。舞台では過去と未来とが切り替わる中、劇団員さんは声量豊かで迫真の演技をされておりました。最終場面二〇分。対極にある「戦争回避の道」(平和な

未来)のシーンは大変感動し胸を撫で下ろした思いでした。戦争は軍部だけが悪いのではなく文官たちも悪い影響を与えたのではないか?いつの世も多様な意見や考えは尊重され、時には勇気を持って戦わせることの重要性を今もこれから大切なことと古川健さんは主張し、総合的にはこの作品を通じて「戦争」についてみんなで考える機会を与えてくれたのだと考察いたします。

(男性)

【六〇代】

▼果たして戦中の日本に選抜肢はあったのか。この問いを居酒屋の茶番劇でしか語れぬところに現代日本の闇があると思うのだが。

(男性)

▼感動。難解な設定を個人の声、体格、衣装で表現。現実と理想と大別されるものを腑におちさせる。芝居、演劇の力。感服。

(女性)

▼戦前に「総力戦研究所」というものがあり、日本の敗北を予測していたことが驚きでした。戦争は東條英機などの軍人が主導していたとおもっていたので、近衛文麿首相と松岡洋右外相に国の方向を誤らせた重い責任があるのを感じました。近代史の大事なことを学んだ気がします。お芝居では「知っているのに何もしなかった」責任を真摯に感じている二人の文官の姿です。戦前は治安維持法や特高警察があり、言論が統制され、暴力で押えられていました。それでも原爆投下や空襲にあって、戦争の酷さに何か

できなかつたのかと悩む姿は希望でもあるかなと思いました。

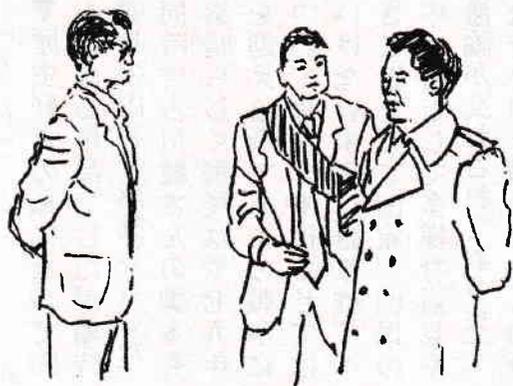
(女性)

▼重たいテーマの作品だったがテンポの良さに引き込まれ、二時間一〇分があつと言う間に過ぎた。難しい事件の話が次々と出てくるが、一人の俳優だけではなく別の俳優にも語らせる等理解しやすかった。負けるとうわかつていてなぜ戦争につき進んだのか、またそれを止められなかった自責の念。最後の場面は現在の私達につきつけられている重たい課題だ。

(女性)

▼舞台上で練り広げられる劇中劇の迫力に圧倒された。役者も上手く演じていたと思う。綿密に調査した史実をもとに展開される物語に脚本家古川健の凄さを感じ

た。日米開戦の帰還不能点(もう後には戻れない)が、ゴムの資源が確保できなければ軍部がその組織を維持できないという身勝手な理由だったということも、鮮明に見えてくる。「二度と戦争を繰り返してはならない」という作者のメッセージがはつきりと伝わってくる舞台だった。チョコレートケーキの作品は、いつも明確な





メッセージを伝えてくれる。
また別の作品も例会として
ぜひ観てみたい。(男性)

▼劇中劇で、入れ替わり役
が変わる、という凝った脚
色だった。引き込まれて、
途中から、境界線が解らな
くなった。力技だった。水
を打ったような張り詰めた
空気に鳥肌が立った。(男性)

【七〇代】

▼総力戦研究所(海軍・陸軍・
各省庁・民間会社のエリー
ト三〇代四〇代の人を集め
た)といった機関があった
ことを初めて知った。模擬
内閣で色々な意見を出し合
い結果、この戦争は必ず負
けると結論が出たのになぜ
止められなかったのか、今
なら止められるだろうかとお
芝居を観ながら考えてい
ました。この戦争の本当の
責任者は誰なのか、陸軍・
海軍・政治家・天皇・日本
国民、結論はすべての日本
人か。役者さんはすごい、
現在から過去へ小物一つで
セリフの言い方が変わり、
飲みながら食べながら展開
していく舞台はすごい、ス
トリも分かりやすく後半
部分では何故か久しぶりに
泣かされました。(女性)

▼理解するのに、とまどい
ました。ついていけない私
でしたが、見応えのある舞
台でした。平和を守りたい
!! (女性)

【年代・性別不明】

▼もしも運命だったならど
うすることもできなかった
のかもしれない。だとして
も自分ではできる限りの事
やりつくしたろうか?もっ
とやれることがあるのでは
ないか?今日という時間を、
そう問いながら生きていこ
うと思いました。

▼男達の議論を終始、隅で
じっと聴いていた赤い服の
女性。彼女が言葉を発した
時、鮮やかに浮き上がるヒ
ロシマの惨さ。岡田の真摯
な情けが女性の生きる意志
を惹起させた。

編集スタッフから

七月の芝居の後で、朝の連
続ドラマ「虎に翼」で総力戦
研究所のエリートの話があり
ました。戦後の憲法をめぐる
内容に朝の一五分に心おど
りました。自分も憲法をよりど
ころにしてきた事をあらため
て思い。今政権は国連憲章の
精神をより徹底した日本国憲
法を踏みにじり、九条を変え
て「戦争する国」にするため
に、うごめています。世界
に誇る日本の憲法を守り、い
かすために頑張りたい。